

2026年3月22日 ルカ22:54-71

説教題 「主は振りむいてペテロを見つめられた」

「だが、今はあなたがたの時、また、やみの支配の時である」(53節)。

夜の暗闇に紛れてやみの働きが進んでいきます。暗躍です。

イエス様は引かれていき、ペテロ以外の弟子たちは散り散りに逃げ去りました。

「今夜、あなたがたは皆わたしにつまずく…『わたしは羊飼を打つ。そして、羊の群れは散らされるであろう』と、書いてあるからである。」(マタイ 26:31)とのイエス様の言葉の通りとなりました。

そしてペテロにもその時はやってきます。

「この人もイエスと一緒にいました」「あなたもあの仲間のひとりだ」「たしかにこの人もイエスと一緒にだった」。

イエス様のそばを離れずに、誰よりもイエス様のおそばに共にいて共に時を過ごしたペテロ。漁師の網を捨てて従って以来、彼はイエス様の教えと奇跡の業に心の底からの信仰を抱いて「主よ、わたしは獄にでも、また死に至るまでも、あなたとご一緒に行く覚悟です」とまで言ったのに。

「シモン、シモン、見よ、サタンはあなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って許された。しかし、わたしはあなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈った。それで、あなたが立ち直ったときには、兄弟たちを力づけてやりなさい」

「主は振りむいてペテロを見つめられ」ました。それは非難の眼差しではありません。

意を決しても腰砕けになる弱い私たち。しかし私たちには主の優しい視線があるのです。

序 誘惑に陥らないように、目をさまして祈っていなさい

ルカ 22:42 「父よ、みこころならば、どうぞ、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの思いではなく、みこころが成るようにしてください」。

22:43 そのとき、御使が天からあらわれてイエスを力づけた。

22:44 イエスは苦しみもだえて、ますます切に祈られた。そして、その汗が血のしたたりのように地に落ちた。

22:45 祈を終えて立ちあがり、弟子たちのところへ行かれると、彼らが悲しみのほて寝入っているのをごらんになって

22:46 言われた、「なぜ眠っているのか。誘惑に陥らないように、起きて祈っていなさい」。

マルコ 14:33 そしてペテロ、ヤコブ、ヨハネと一緒に連れて行かれたが、恐れおののき、また悩みはじめて、彼らに言われた、

14:34 「わたしは悲しみのあまり死ぬほどである。ここに待っていて、目をさましていな

さい」。

14:35 そして少し進んで行き、地にひれ伏し、もしできることなら、この時を過ぎ去らせてくださるようにと祈りつづけ、そして言われた、

14:36 「アバ、父よ、あなたには、できないことはありません。どうか、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの思いではなく、みこころのままになさってください」。

14:37 それから、きてごらんになると、弟子たちが眠っていたので、ペテロに言われた、「シモンよ、眠っているのか、ひと時も目をさましていることができなかつたのか。」

14:38 誘惑に陥らないように、目をさまして祈っていなさい。心は熱しているが、肉体が弱いのである」。

皆様おはようございます。春分の日も過ぎ、だいぶ春らしく温かくなってまいりました。寒暖の差のありますこの頃、どうぞご自愛ください。

いよいよ来週は受難週です。そして再来週はイースターです。

マタイ 26:26 一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、祝福してこれをさき、弟子たちに与えて言われた、「取って食べよ、これはわたしのからだである」。

26:27 また杯を取り、感謝して彼らに与えて言われた、「みな、この杯から飲め。」

26:28 これは、罪のゆるしを得させるようにと、多くの人のために流すわたしの契約の血である。

イエス様は最後の晩餐の場で聖餐式をなさり、「みな、この杯から飲め。これは、罪のゆるしを得させるようにと、多くの人のために流すわたしの契約の血である。」と語られました。イエス様は私たちを含む多くの人たちの救いのため、十字架で血を流し、その命をおささげになられました。

そんな最後の晩餐の直後のことです。

「だが、今はあなたがたの時、また、やみの支配の時である」(53節)。

夜の暗闇に紛れてやみの働きが進んでいきます。暗躍です。

イエス様は引かれていき、ペテロ以外の弟子たちは散り散りに逃げ去りました。

「今夜、あなたがたは皆わたしにつまずく…『わたしは羊飼を打つ。そして、羊の群れは散らされるであろう』と、書いてあるからである。」(マタイ 26:31)とのイエス様の言葉の通りとなりました。

そしてペテロにもその時はやってきます。

ルカ 22:53 毎日あなたがたと一緒に宮にいた時には、わたしに手をかけなかった。だが、今はあなたがたの時、また、やみの支配の時である」。

22:54 それから人々はイエスを捕え、ひっぱって大祭司の邸宅へつれて行った。ペテロは遠くからついて行った。

22:55 人々は中庭のまん中に火をたいて、一緒にすわっていたので、ペテロもその中にすわった。

22:56 すると、ある女中が、彼が火のそばにすわっているのを見、彼を見つめて、「この人もイエスと一緒にいました」と言った。

22:57 ペテロはそれを打ち消して、「わたしはその人を知らない」と言った。

「この人もイエスと一緒にいました」。

1 ヨハネの手紙の冒頭の言葉が思い出されます。

1:1 初めからあったもの、わたしたちが聞いたもの、目で見えたもの、よく見て手でさわったもの、すなわち、いのちの言について――

「この人もイエスと一緒にいました」。これは弟子たちの称号です。主と共にいて、共に過ごし、どこに行くにも共に行動して寝起きを共にして主のご薫陶を受ける。主から選ばれて弟子として招かれたということはなんとという光栄であったのでしょうか。そして彼らは主の大胆なる権威ある聖書の解き明かしをなされるのを聞きました。そして力ある御業を見ました。そもそも彼らはガリラヤ湖での大漁の奇跡の力ある御業を見て、漁師の網を捨てて主に従いました。

マタイ 7:28 イエスがこれらの言を語り終えられると、群衆はその教にひどく驚いた。

7:29 それは律法学者たちのようではなく、権威ある者のように、教えられたからである。

ちなみに群衆が驚いた、イエス様の説教は以下のものでした。

7:7 求めよ、そうすれば、与えられるであろう。捜せ、そうすれば、見いだすであろう。門をたたけ、そうすれば、あけてもらえるであろう。

7:8 すべて求める者は得、捜す者は見だし、門をたたく者はあけてもらえるからである。

7:9 あなたがたのうちで、自分の子がパンを求めるのに、石を与える者があろうか。

7:10 魚を求めるのに、へびを与える者があろうか。

7:11 このように、あなたがたは悪い者であっても、自分の子供には、良い贈り物を知っているとすれば、天にいますあなたがたの父はなおさら、求めてくる者に良いもの

を下さらないことがあるか。

7:12 だから、何事でも人々からしてほしいと望むことは、人々にもそのとおりにせよ。これが律法であり預言者である。

7:13 狭い門からはいれ。滅びにいたる門は大きく、その道は広い。そして、そこからはいつて行く者が多い。

7:14 命にいたる門は狭く、その道は細い。そして、それを見いだす者が少ない。

7:15 にせ預言者を警戒せよ。彼らは、羊の衣を着てあなたがたのところに来るが、その内側は強欲なおおかみである。

7:16 あなたがたは、その実によって彼らを見わけるであろう。茨からぶどうを、あざみからいちじくを集める者があるか。

7:17 そのように、すべて良い木は良い実を結び、悪い木は悪い実を結ぶ。

7:18 良い木が悪い実をならせることはないし、悪い木が良い実をならせることはできない。

7:19 良い実を結ばない木はことごとく切られて、火の中に投げ込まれる。

7:20 このように、あなたがたはその実によって彼らを見わけるのである。

7:21 わたしにむかって『主よ、主よ』と言う者が、みな天国にはいるのではなく、ただ、天にいますわが父の御旨を行う者だけが、はいるのである。

7:22 その日には、多くの者が、わたしにむかって『主よ、主よ、わたしたちはあなたの名によって預言したではありませんか。また、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって多くの力あるわざを行ったではありませんか』と言うであろう。

7:23 そのとき、わたしは彼らにはっきり、こう言おう、『あなたがたを全く知らない。不法を働く者どもよ、行ってしまえ』。

7:24 それで、わたしのこれらの言葉を聞いて行うものを、岩の上に自分の家を建てた賢い人に比べることができよう。

7:25 雨が降り、洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけても、倒れることはない。岩を土台としているからである。

7:26 また、わたしのこれらの言葉を聞いても行わない者を、砂の上に自分の家を建てた愚かな人に比べることができよう。

7:27 雨が降り、洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけると、倒れてしまう。そしてその倒れ方はひどいのである」。

マタイ 16:23 イエスは振り向いて、ペテロに言われた、「サタンよ、引きさがれ。わたしの邪魔をする者だ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている」。

このように主からいさめられたりもしたペテロでしたが、彼の主への熱心は人一倍でした。他の弟子たちが散り散りに逃げて行ってしまっても、彼だけはイエス様を追って、敵地である大祭司の庭にまで進んでいきました。それはまさに彼がこう言ったとおりです。

22:33 シモンが言った、「主よ、わたしは獄にでも、また死に至るまでも、あなたとご一緒に行く覚悟です」。

しかし無情にも事は進んでいきます。彼の熱意は腰砕けになってしまいます。

22:54 それから人々はイエスを捕え、ひっぱって大祭司の邸宅へつれて行った。ペテロは遠くからついて行った。

22:55 人々は中庭のまん中に火をたいて、一緒にすわっていたので、ペテロもその中にすわった。

22:56 すると、ある女中が、彼が火のそばにすわっているのを見、彼を見つめて、「この人もイエスと一緒にいました」と言った。

22:57 ペテロはそれを打ち消して、「わたしはその人を知らない」と言った。

イエス様と一緒にいたということを否定しなければならないということはこれ以上ない屈辱であったでしょう。彼は自分を救いたいと思うあまりに、全く心にもないことを続けざまに口から出してしまいます。後になってみれば、それは彼が死ぬよりもつらいことであったのではないのでしょうか。

死んでもあなたを離れない。あなたと共に獄にでも死にでもご一緒しますと言っていたペテロが、自分はイエス様と一緒にいかなかったし、知りもしないと言ってしまうのです。ペテロは後々までこの彼の弱さを悔やんだことだと思えます。

イエス様のことを神の子、神ご自身と認めない闇の働きの中に捕らわれている人たちと全く同じ愚挙をしてしまったという彼の後悔の慟哭はあまりにも痛々しく、そしてその彼の心情は察するに余りあります。

本心でないことを言っているのか、いや実はそれが彼の本心だったのか。危険を前にして、自己保身に走って恩師を知らんぷりする、あまりに打算的で恩知らずの行動。師匠の恩に仇で報いる行動。これは絶対にあってはならないことです。主との間にあまり接点のない人ならばいざ知らず、主の一番弟子と目されるような人のこの否認は、イエス様を悲しくさせ、そして敵たちからの大きなそしりを呼ぶことになったのです。

22:58 しばらくして、ほかの人がペテロを見て言った、「あなたもあの仲間のひとりだ」。するとペテロは言った、「いや、それはちがう」。

22:59 約一時間たってから、またほかの者が言い張った、「たしかにこの人もイエスと一緒にだった。この人もガリラヤ人なのだから」。

22:60 ペテロは言った、「あなたの言っていることは、わたしにわからない」。すると、彼がまだ言い終らぬうちに、たちまち、鶏が鳴いた。

弟子として失格です。そんなことがあるものか、どうして主は私の意気をくじくようなことをおっしゃるのか。私の忠誠心を試みるようなことをおっしゃるのか。信じてはくださらないのか。鶏が早朝に鳴くこの夜明けまであと一体何時間しかないと思っておられるのか。絶対にそんなことはない。あり得ない。しかし彼の意気はくじかれました。3度までも完ぺきにくじかれ、彼の決意は完膚なきまでに破られ、彼は失敗を犯しました。言い逃れは決してできません。

彼の舌の根の乾かぬ内に、彼の言葉の言い終わらぬうちに、鶏が鳴きました。主のおっしゃったことが正しかったのです。

22:61 主は振りむいてペテロを見つめられた。そのときペテロは、「きょう、鶏がなく前に、三度わたしを知らないと言うであろう」と言われた主のお言葉を思い出した。

22:62 そして外へ出て、激しく泣いた。

鶏が鳴き、主の言葉を思い起こし、イエス様のお言葉を思い出して彼は我に返り、ペテロはイエス様の視線に耐え切れず、自分自身の行いを深く悔やんでその場から逃げ去って大祭司の庭から外に出て、それはそれは激しく泣き悶えました。彼は自分自身が許せなかったのではないのでしょうか。自分の不甲斐なさにほぞをかみ、元には戻せない自分の大失敗に、消えてなくなりたいような思いに苛まれたのではないのでしょうか。

しかし主の眼差しはあたたかいものでした。そのまなざしが厳しいものであったらまだたれにとっては救いであったかもしれません。しかし主の眼差しは優しく、いたわりに満ちたものでした。それは主のこのお言葉からわかるのです。

22:31 シモン、シモン、見よ、サタンはあなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って許された。

22:32 しかし、わたしはあなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈った。それで、あなたが立ち直ったときには、兄弟たちを力づけてやりなさい」。

ここでもまた、誰一人として自分の行いを誇ることはできず、ただ主の赦しの憐れみによるということが示されました。

22:63 イエスを監視していた人たちは、イエスを嘲弄し、打ちたたき、

22:64 目かくしをして、「言いあててみよ。打ったのは、だれか」ときいたりした。

22:65 そのほか、いろいろな事を言って、イエスを愚弄した。

22:66 夜が明けたとき、人民の長老、祭司長たち、律法学者たちが集まり、イエスを議会に引き出して言った、

22:67 「あなたがキリストなら、そう言ってもらいたい」。イエスは言われた、「わたしが言っても、あなたがたは信じないだろう。

22:68 また、わたしがたずねても、答えないだろう。

22:69 しかし、人の子は今からのち、全能の神の右に座するであろう」。

22:70 彼らは言った、「では、あなたは神の子なのか」。イエスは言われた、「あなたがたの言うとおりでである」。

22:71 すると彼らは言った、「これ以上、なんの証拠がいるか。われわれは直接彼の口から聞いたのだから」。

ここには本心から主を信じない人たちの群れがあります。物見遊山に馬鹿にして主を見せ者として楽しむ人たちです。イエス様をご自身が誰であるのかを言っても、真理を言っても誰一人として相手にはしません。大祭司も学者たちも目がふさがれています。「私が神の子だ」と主がおっしゃっても、そんなことがあるはずがないと言って退けるのです。

ペテロも主を否み、弟子たちは逃げ、そして祭司長も律法学者たちもみな主を信じませんでした。まさにやみの支配の時です。そして今日もその支配の時は続いています。

しかし私たちには主の眼差しがあります。私たちは主と共にある者、主を信じ、主の御業に倣うものです。たくさんの腰砕けと共にふるいにかけてられれば失格者の烙印を押されるがままの者です。しかし私たちは失敗のままにはい続きません。私たちは主の眼差しと祈りによって再び立ち上がる時を得るのです。そして互いを思いやる愛によって助け合って生きるのです。もはやみな失格したものとして、誰が一番偉いなどとは決して語らず、語れず、私たちを赦すために祈り、助け、十字架に身代わりとなって死んでくださったイエス様を一番偉い方と信じて突き進むのです。

◇祈禱；天の父なる神様、今日の礼拝を感謝します。イエス様の弟子でありながら、イエス様と共にいたことを否定し、イエス様との関係をも否定したペテロの心の痛みはどれほどのものだったのでしょうか。あんなに尊敬して、「御一緒になら、牢に入っても死んでもよいと覚悟し

ております」とまで言ったのに。誘惑に陥らぬよう、起きて祈っていな  
さいとの御言葉が心に響きます。あらゆる苦しめる方々を神様の救い  
と平安の中にお導き下さい。私たちの家族と、地域の方々を祝福して下  
さい。私たちをお用い下さい。主イエス様の御名によって祈ります。ア  
ーメン